カラー版 中国の詩集 1

屈原詩集

中国の詩集 1

屈原詩集

黒須重彦訳

訳者　黒須重彦

山梨県甲府市に生まれる．旧制第一高等学校を経て，1953年東京大学文学部中国文学科卒業．「軌道」「DON」同人．

昭和四十八年一月二十五日　初版発行
昭和五十三年六月　十　日　再版発行

訳　者　黒須重彦
発行者　角川春樹
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
郵東京三一一九五一〇八　振〇〇一
電話東京三(二六二)七一一一(大代表)

中国の詩集　①
屈原詩集

印刷カラー　旭印刷株式会社
本文　信教印刷株式会社
製函　三真堂印刷紙器株式会社
製本　株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0398-590701-0946(1)

目次

九　歌〈九つの歌〉　七
東皇太一〈われらが大いなる上天の神〉　八
雲中君〈雲の神〉　一一
湘　君〈湘水の神〉　一四
湘夫人〈湘水の女神〉　一〇
大司命〈運命の神〉　二六
少司命〈恋する女神〉　三
東　君〈日の神〉　三六
河　伯〈黄河の主〉　四〇
山　鬼〈老醜悲傷〉　四三
国　殤〈若き戦没者〉　四七
礼　魂〈心から上天の神を送る〉　五〇

天問抄〈天からの質問〉　五三
第一章〈昔昔ノズット昔ノ〉　五五
第二章〈洪水ヲ治メル力モナイノニ〉　六一
第三章〈崑崙ノイタダキニ〉　六六
第四章〈君ノタメ力ヲ尽シ〉　七一
第五章〈アノ寒浞ノ子〉　七七

招　魂〈迷える魂よ　帰れ〉　八三
序〈序〉　八四
第一章〈魂よ　とく帰れ〉　八六
第二章〈君　天に上る無かれ〉　九四
第三章〈君　故居に帰れ〉　九六
第四章〈君を待つ美しい乙女子ら〉　一〇三
第五章〈翡翠の帷帳〉　一〇七
第六章〈君を待つ御馳走〉　一一〇
第七章〈艶なる歌姫たち〉　一一四
第八章〈尽きない歓楽〉　一一八
第九章〈乱のうた〉　一二三

九章抄〈九つの章〉　一二七
涉　江〈長江にさすらい行く〉　一二八
哀　郢〈なつかしい郢の都〉　一三六
抽　思〈わが心の傷み〉　一四六
橘　頌〈橘の歌〉　一五〇

離　騒〈終りなき憂愁のうた〉　一五七
第一章〈私はかの名高い〉　一六八
第二章〈古の聖王たちは〉　一七二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三章〈あのかぐわしい蘭を〉　一七六
第四章〈思い返せば〉　一八四
第五章〈私を気づかって〉　一八八
第六章〈舜帝の霊廟に〉　一九六
第七章〈霊草の瓊茅で〉　二〇七
第八章〈霊雰があのように〉　二一八
第九章〈かくて日の〉　二二三
第十章〈乱のうた〉　二二四
解説　二二七

屈原詩集

九　歌〈九つの歌〉

東皇太一

吉日　辰良
穆しみて将に上皇を愉しましめんとす
長剣の玉珥を撫すれば
璆鏘として琳琅鳴る

瑤の席に玉の瑱
瓊芳を盍せ将ち把り
蕙肴を蒸し　蘭を藉き
桂酒と椒漿とを奠う

枹を揚げて鼓を拊ち
節を疏緩にして安らかに歌う
竽瑟を陳ねて浩倡す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

霊　偃蹇として妓服し
芳　菲菲として堂に満つ
五音紛として繁会すれば
君　欣欣として楽康す

〈われらが大いなる上天の神〉

今日はよき日　このうるわしい朝
ここに敬しんで上天の神を慰さめ奉る

進み出る巫の長い剣　玉ちりばめたその柄に手をやれば
腰に帯びたる琳琅の宝玉　触れ合って　音さやかに鳴りわたる

清らかな白玉でおさえた　瑤美わしい神前の席の上を
馥郁と香る花束　しずしずと献げ持ち
蕙草の香のしみた供えの肉を　ほのかにかおる蘭の葉にのせ

肉桂の香かおる酒と山椒の香のする飲み水を奉る

枹を揚げて鼓を打ち
拍子ゆるやかにのどかにうたい
笙を吹き　瑟を弾き　高らかにうたう

着かざった巫はしなやかに舞い
花の香りは広間の中にたちこめて
奏でる楽器の　妙なるハーモニー

神は今こそうれしげに安んじ楽しみたもう

雲中君

蘭湯に浴し芳に沐す
華采の衣は英の若し
霊　連蜷として既に留まり
爛として昭昭として未だ央きず

蹇　将に寿宮に儋んぜんとして
日月と光を斉しくす
竜駕して帝服し
聊く翺遊して周章す

霊　皇皇として既に降れど
猋ち遠く雲中に挙がる
冀州を覧て余り有り
四海に横わって焉ぞ窮まらん

夫の君を思いて太息し
労心を極めて懺懺たり

〈雲の神〉

巫は　蘭の香ただよう湯にゆあみし　よき芷の香満つる湯で髪洗い
その身につけた衣は　五色の彩り　まるで花のよう
神霊はゆらゆらと雲の中より天降り　宿りたまえば
巫の頬　限りなく霊気に輝き——

ああ　雲の神は　今こそこの祭殿に安らぎ
日と月とひとしく光り輝き
竜に車を引かせ　この世ならざる天帝の衣を着て
今しばしここに遊び　たゆたいたもう

神霊は輝かに天降(あまくだ)りたもうたが
それもつゆのま　たちまち雲中に帰りたもう
空ただよう雲の神は　冀(き)州を覧(み)たもうだけでなく
この世の果まで　ひろびろと　どこまでもどこまでも空行きたもうことだろう

ああ人は誰でも　かの雲の君を恋い慕い　なぜかほっと息をつき
心の中はあれこれと尽きることなく思い悩むのです

湘君

君行かずして夷猶す
蹇　誰か中洲に留まれる
美しく要眇として宜修に
沛として吾桂舟に乗る

沅湘をして波無からしめ
江水をして安らかに流れしめ
夫の君を望めども未だ来らず
参差を吹いて誰をか思う

飛竜に駕して北に征き
遭りて吾洞庭に道す
薜荔の柏　蕙の綢
蓀の橈　蘭の旌

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com